

称号及び氏名 博士（人間科学） 奥本 陽子

学位授与の日付 2022 年 3 月 31 日

論文名 R. シュタイナー言語論に関する人間形成論的考察

——アイデンティティ形成における超越的地平をたずねて——

論文審査委員 主 査 吉田 敦彦

副 査 酒井 隆史

副 査 西田 芳正

副 査 森岡 次郎

論文要旨

本論文は、シュタイナー言語論を、全体的、構造的に解明し、教育実践への具体的展開を検証した上で、テイラーを参照枠として、そのアイデンティティ形成における現代的意義と妥当性を明らかにしたものである。

序章では、近現代の重要な議論の1つに、アイデンティティ形成に伴う排他性という問題があることを指摘し、それを克服するために提唱された「アイデンティティを超えるアイデンティティ」を探求するにあたり、言語を超越的地平との関連において再考することが課題であることを示した。この課題に応えるロマン主義や現象学に根差した言語観は、テイラーが定式化した言語の「表現理論」と重なる。本論文が対象とするシュタイナーの言語論は、超越的地平に触れる際の思考や言語を編み出している点で、その潮流にあると考えられ、考察の対象にふさわしいことを確認した。これを踏まえ、本論文の目的が、シュタイナー言語論の全体構造を超越的地平まで包括して解明し、実践への具体的展開を検証した上で、現代的意義を考察することであることを明確にした。そして、主に後期思想において展開されるシュタイナー言語論を、前後期を貫く思考概念との連関において明らかにし、その上でテイラーの言語理論と地平論を参照枠として検討するという研究方法をとることを述べた。

第1章では、シュタイナーの言語論に関する先行研究をレビューし、それらの到達点と課題を明らかにした。シュタイナーによる言語に関係する論考を対象とする研究は、様々な主題のもとで行われているが、基本的には言語全般、外国語教育、教師による「語り」、芸術としての言語に焦点化したものという4つに分類できる。これらに加えて、シュタイナー思想における思考や瞑想を主題として超越的地平に論及した先行研究を取り上げて検討した。その結果、(1)シュタイナーの言語に関する研究には、認識論や思考論、身体論、芸術論な

どの緒論を横断して、包括的に論じられているものは見当たらないこと、(2)超越的地平との関連において思考を定義し、言語の変容と関係づけて論じたものはほぼないこと、(3)アイデンティティや人間形成との関連において論じられているものもないこと、さらに(4)現代の言語を巡る思想の諸相の中に位置づける試みはされていないことが明らかになった。本論文は全体を通して、これらの4つの点に踏み込んだ議論を展開する点に、研究上の意義があることを明示した。

第2章では、まず初期の著作からシュタイナーの思考論を読み解き、知覚界における無機的自然の法則を考察する「証明（論理）的思考」、有機的自然と超越的地平の法則を考察する「直観的思考」という2つの思考の様式を得た。これを踏まえ、後期著作の解説を通して「直観的思考」を明確にする中で、シュタイナーの思想における超越的地平を〈理念界〉として理解し、(1)個人が直観的思考を通して捉える〈理念界〉における普遍的な〈理念〉、(2)個人がとらえた〈理念〉をその躍動性を保ったまま知覚界において表した「理念」、(3)知覚界において具現化または一般化され、時に〈理念〉との繋がりを失った理念という3つの次元で理念を捉えることができることを示した。それによって、思考と言語の関係性がより明確になり、個人が直観的思考によって捉えた〈理念〉を、その躍動性を失うことなく「理念」として表現する言語を、証明（論理）的思考の言語との対比を通して考察することがシュタイナー言語論緒考察の要となることを明らかにした。加えて、個人の「理念」を、生きる意味や目的としての「アイデンティティ」として理解することが可能になった。

第3章では、第2章を受けて、シュタイナーが提示した「原言語」、「民族の言語」、「（論理的）思考の言語」の3つの領域に、「直観的思考の言語」を加え、それぞれの特徴と連関構造を明らかにすることを試みた。その結果、まずシュタイナーは、ロゴスとのつながりを残した「原言語」が、各々の芸術性を発展させた「民族の言語」へ、さらに個別的な「思考の言語」へと変容してきたとみなし、「思考の言語」には論理的思考に基づく論理性があることを認める一方で、抽象性と自己完結性という課題があると考えていたことが明らかにされた。さらに、これをシュタイナーによる人間の構造部分と自我（私）の変容との関連において読み解くことで、言語の4つの領域及びその分化と変容は、人間の4つの自我（私）とその変容と重なることがわかった。そして、自我（私）がより意識的に目覚め、「思考の言語」の論理性に、「原言語」と「民族の言語」の全体性、身体性、芸術性を融合させ、言語の形成力を生かして「善く語る」努力をすることによって、「思考の言語」の問題が克服され、「直観的思考の言語」が実現されることが明らかになった。

第4章では、シュタイナーが編み出した「言語造形」と「特徴づけ」を、言語の全体性、身体性、芸術性を取り戻す目的をもつ「語り」の技または方法論として位置づけ、その内実を教育との関係において考察した。これによって、「言語造形」における音楽的な「朗吟」は、〈理念界〉における〈理念〉をその躍動性を失うことなく「理念」として表現すること、造形的な「朗誦」は、直観的思考が世界に見出した「理念」を固定化せず、〈理念〉に限りなく近い形で現すこと、さらに「特徴づけ」は、〈理念〉が「理念」との往還を通して一瞬

なりとも現れ出ることができるような場を用意することが明らかにされた。また、実践の場であるシュタイナー学校では、子どもの七年周期の発達論が言語の変容と重ねて理解され、教師と子どもが「言語造形」と「特徴づけ」を行うことで、第3七年期において育成される「思考の言語」が抽象的で自己完結的にならず、個人の「理念」または「アイデンティティ」が生き生きと言語化され、変容へと開かれたものであるように工夫されていることが明らかになった。このように、シュタイナー教育において、「直観的思考」が教えられることはないが、その準備としての言語活動が準備されていることが示された。

第5章では、現代の思想状況を踏まえた、汎用性の高い理論枠組であるテイラーの言語論と地平論を参照して、シュタイナー言語論の特徴、及び現代的意義について考察した。その結果、シュタイナー言語論は、〈理念界〉やその言語的現れとしてのロゴスや原言語を含みこむ点で、意味の全体的背景としての「言語の背景網」に匹敵する深みをもち、テイラーがヘルダーを祖とみなした言語の表現理論の系譜に位置づけられることが確認された。また、他者との対話を通して、自我（私）はより意識的になり、既存の枠組に固執した排他的なアイデンティティを超えようとする中で、「共同体の精神」を呼び寄せるまでに対話を深め、個々人の「理念」を、〈理念〉にまで高めて共有し、さらに共有された〈理念〉を再び個々人が知覚界において言語化するという形で、新たな超越的地平に根差した「アイデンティティ」を構想していたことが示された。これによって、シュタイナー言語論は、言語を位階秩序に組み込むことも、理性の範囲内に限定することもなく、また善や心理などの次元を相対主義的に扱い、対話の成立を困難にすることもないことになる。そして、自我（私）や思考の変容、対話の場に働く作用、言語の芸術性や新体制に意識的になることを通して、人間はコンテクストを超えた〈理念〉に触れ、「理念」として言語化し分有できるとみなしたことが明らかにされた。以上により、シュタイナー言語論はテイラーのいう新しい超越性の地平における「より繊細な言語」たり得ることが示された。

結章では、本論文の概要を確認した上で、超越的地平に触れるための言語とはどのような言語化について、以下の4点を示した。シュタイナー言語論に即した、超越的地平に触れる際の言語とは、(1) 論理的思考とその言語が持つ論理性に、芸術性と身体性を融合した言語、(2) 〈理念〉としてのみ捉え得る「アイデンティティを超えるアイデンティティ」を、「理念」として可能な限り明瞭に言語化する言語、(3) 位階的秩序や規範的制度に組み込まれることなく、善や真理について語るための言語、(4) 「言語造形」と「特徴づけ」という具体的教育方法を有する言語である。以上の4点は、シュタイナー言語論をテイラーの言語論と対照させ、両言語論の補完関係を読み解くことで浮き彫りになったものであり、シュタイナー言語論が、超越的地平に触れる言語を可能にし得る確かな理論とその実践方法を備えた言語論であることが明らかにされた。

初出一覧

序章 書き下ろし

第1章 書き下ろし

第2章 奥本陽子 2018「シュタイナーの「直観的思考」－思考を通して超越に触れる道」
『教育哲学研究』第118号、1・19.（査読有）

第3章 奥本陽子 2020「シュタイナーにおける言語の構造的理解－『語り』の人間形成的
意義を問い直す」『人間社会学研究集録』第15号、29・50.（査読有）

第4章 Okumoto, Y. 2019, Enlivening thinking and speech in search of spiritual identity:
the role of 'speech formation' in Steiner's Waldorf education, International Journal of
Children's Spirituality. Vol.24, No.1, 83・96.（査読有）

第5章 奥本陽子 2016「チャールズ・テイラーにおけるアイデンティティー道徳的源泉と
しての「超越性」と「より繊細な」言語を巡って－」『ホリスティック教育研究』第19号2
・58.（査読有）

結章 書き下ろし

学位論文審査結果の要旨

学位申請論文：奥本陽子著「R.シュタイナー言語論に関する人間形成論的考察——アイデンティティ形成における超越的地平をたずねて」について、本学位論文審査委員会は、博士論文審査基準に照らして厳正な審査を行い、以下の評価と結論に至った。

審査委員会：第1回 2022年2月14日（月）17：30～18：00

第2回 2022年2月15日（火）17：00～18：00

第3回 2022年2月22日（火）12：00～12：45

1) 研究テーマが絞り込まれている

本論文は、ルドルフ・シュタイナーの言語に関する緒論を、その全体連関を解明しながら統合的に再編し、教育実践への具体的展開を検証した上で、超越的地平をも視野に入れたアイデンティティ形成の現代的意義と可能性を論じたものである。したがって、シュタイナーの広範な著作・講演録の中から言語論を対象を絞り、考察する課題も、それと関連付けられた教育実践とアイデンティティ形成における意義に限定しているため、十分に研究テーマは絞り込まれている。

2) 研究の方法論が明確である。

テキスト解読の方法として、次の3点を明確にしている。(1) シュタイナーによる人間個体や人類の発達進化論の大きな枠組みにおいて、言語に関する緒論の構造的な連関を読み解くこと、(2) とりわけ超越的地平にある〈理念〉を把握する直観的思考と言語との関連をドイツ・ロマン主義の文脈を踏まえて解明すること、(3) 現代思想の参照枠として Ch.テイラーのアイデンティティ論、言語論、地平論を用いて、解明されたシュタイナー言語論の意義を考察すること、以上の3つの分析方法を明確にしている。

3) 先行研究が十分に踏まえられている。

第1章において、関連するシュタイナーの言語と教育に関する先行研究を網羅的にレビューし、次の4点を導き出している。すなわち、(1) シュタイナー言語論に関する研究は、各論的なテーマとの関連において論じたものに限られており、言語論そのものを主題化して構造的、包括的に解明したものは見当たらないこと、(2) 超越的地平との関連において思考を定義し、言語の歴史的変容などと関係づけて論じたものはほぼないこと、(3) 教育実践の方法論のレベルを超えて、アイデンティティ形成との関連においてシュタイナーの言語論を研究しているものもないこと、そして(4) それを言語や超越的地平をめぐる現代思想の文脈に位置づける試みは為されていないことを明らかにした。これを踏まえて上記の研究課題が設定されており、先行研究レビューは必要にして十分である。

4) 結論に至る論理展開が説得的である。

序章と第 1 章で先行研究を踏まえて、言語とアイデンティティ形成をめぐる問題を整理し、その問題を探求するためにシュタイナー言語論に着目する理由を明らかにしたうえで、以下の 4 つの章を次のような論理展開によって構成している。

シュタイナーの後期思想における「言語」緒論を読み解くために、まず第 2 章で、彼の前期思想において精緻に概念化されている「思考」概念について、〈理念〉(＝ロゴス)を直観する拡張された思考のあり方にまで深めて究明する。そこに、本論文に一貫する理論フレームとなる理念の 3 つの次元を整理して提示する。すなわち、(1) 個人が直観的思考を通して捉える〈理念界〉における普遍的な〈理念〉、(2) 個人が捉えた〈理念〉をその躍動性を保ったまま知覚界において言語化した「理念」、(3) 知覚界において具体化または一般化され、時に〈理念〉との繋がりを失った理念である。

この理念の 3 次元を、第 3 章では「言語」概念に適用する。そこに、シュタイナーの言語論の、時間軸(人類の意識進化や個体の自我発達)も組み込んだ包括的な連関構造を把握している。それを踏まえて可能になるのが、第 4 章で明らかにした、シュタイナーの言語教育実践の言語構造論的、自我発達論的基礎づけである。同時に、自我・アイデンティティ形成と言語との連関についても、その具体的様相が浮き彫りになる。

以上の考察を総括しながら、第 5 章では、テイラーの言語論と地平論を参照枠組みとし、「言語の背景網」「より先生な言語」「反啓蒙の地平から新しい超越性の地平へ」といった観点から、シュタイナー言語論とアイデンティティ論の現代的意義を考察している。結章では、あらためて理念の 3 次元フレームに論及しながら、以上に解明した所産を整理し結論づけており、したがって、本論文の結論に至る論理展開は十分に説得的である。

5) 研究内容に独創性があり新しい知見を提示している。

第一に、シュタイナーの講演録等に散在する言語に関する緒論を、思考概念や自我概念との連関において構造的に解明した成果は、シュタイナー思想研究上において独創的なものである。第二に、理念の 3 次元を思考論から導出して言語論に適用し、その第 2 次元に個人の「アイデンティティ」を位置づけるというオリジナルな着眼によって、「アイデンティティを超えるアイデンティティ」を形成する道筋を提示したのは、先行研究には無い知見となっている。第三に、そのことによって、テイラーのいうポスト世俗化時代の「新しい超越性の地平」に、思考や言語を手放すことなくアプローチする可能性を示唆したことは、ポストモダン思想の後の理念探求に関わる一つの新たな知見を提供したものだと言える。

6) 当該研究領域の発展に貢献する学術的価値が認められる。

本論文は、教育哲学・人間形成論領域では、とりわけ「言語と教育」および「教育と

超越」という主題群において学術的価値をもつ。すなわち第一に、従来より教育哲学領域においては、分析哲学や実証主義に対するロマン主義や現象学に根差した言語観による教育研究（Cf.O.F.ボルノー）が課題となってきたが、本論文はこれを主題化して、意味や価値の源泉となる言語がもつ特性や役割、論理的言語との補完関係を明らかにした上で、「言語造形」や「特徴づけ」といった具体的な言語教育の技法を提示している。第二に、世俗化した近代社会における教育にとって、既存の精度的宗教を基盤として教育と超越の関係を捉えるには限界があるなかで、両者の対立、葛藤、統合的な関係性をいかに把握するかが教育人間学的な主要課題となってきた。本論文はこの主題に対して、拡張された思考概念と言語との関連を解明することで、有神論的地平でも啓蒙／反啓蒙的地平でもない新たな超越的地平（テイラー）にアプローチするアイデンティティ形成の可能性を示唆した。以上より、本論文は教育学・人間形成論領域の発展に貢献する学術的価値を認めることができる。

以上